



# 重廣恒夫の 山歩き教室

(6)

## 関西学院大学ワンダー フォーゲル部の遭難に思う(2)



いうところに、油断ではなく、状況が悪くなってもなんとかなるのではないかという「錯誤」があったのではないかと思えます。

昨今の山岳遭難事故のほとんどは「山登りの常識」ではなく、「日常生活の常識(それまでの体験)」を持ち込むことに起因しています。

関西学院大学ワンダーフォーゲル部は専門家や同部OBによる事故調査委員会を設置、事故原因の徹底究明をおこない結果の公表をおこなうこととしています。事故原因の追求からこれからの教訓を導き出すことはできませんが、今後の対応策の解答ではありません。必要なのは今回こういう事態に陥った部員が、この体験を一つの教訓として更に前進することではないでしょうか。休部や廃部などにして部活動の継続をするための原因究明であって欲しいものです。

関西学院大学ワンダーフォーゲル部の遭難については、マスコミ報道も長く続いたので世間の人達の関心も高かったようで、遭難救助にかかるエネルギーと費用の巨額さに驚いた方もたくさんいました。遭難事故が起こるたびに海難事故の救助費用は無料なのに山岳遭難事故の救助では多額の費用がかかるのはなぜかとい質問をよく受けていましたが、今回はその実態を浮き彫りにしました。数千万円と言われる遭難救助費用のうち税金で充当できない500万円ほど

については、関西学院大学側が支う払いの事で決着したようです。

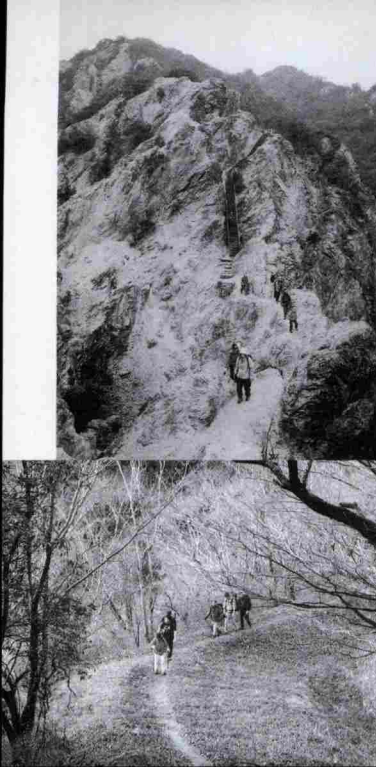
第二次登山ブームの台頭と共に遭難事故も増加しています。携帯電話などの通信機器の普及もあって、ここ数年は安易な救急車やヘリコプターの出動要請があり、地

方自治体によっては救急車の出動が財政に及ぼす影響も少なくないとの苦情も出ていました。昨年未には長野県の田中知事が遭難救助用の県警や防災ヘリを、民間ヘリと同じく登山者自身の負担にすることを検討したいとの発言がありました。最近では民間ヘリではなく防災ヘリを指定してくる登山者もいるように聞き及んでいます。 「自然の中で起こる事故は自己責任」という登山の常識が失われつつある昨今では何らかの対応策は必要かもしれません。

今回の事故は思わぬ「天候の急変」に遭遇した事に起因するといふ事になっていますが、根本は今までの知識と経験で「制御する」ことのできない「自然」の猛威に対応することに無理がありました。今回も無雪期にはなんでもない山と

(しげひろつねお)

1947年山口県徳山市生まれ。71年オニツカ(現アシックス)に入社。73年エベレスト(南西壁の世界最高点(当時)へ到達、77年、日本人としてK2に初登頂、80年、北壁からの新ルートでチョモランマに登頂。88年のチョモランマ交差縦走(日本・中国・ネパール三国友好登山隊)では、登攀隊長として、世界最高峰を舞台にした世界初の交差縦走を成功に導く。92年、当時未踏の最高峰であったナムチャバルワの初登頂を指揮。96年、日本百名山を123日で連続踏破した。



## 第7回六甲山トレッキングツアー（3/24）

トレッキングツアーも中間地点に

『月刊神戸っ子 六甲山トレッキング』も今回で折り返し地点にやってきました。回を重ねるにつれ、少しずつメンバーも増え、見ていただければお分かりですが、老若男女問わず様々な方々にご参加いただいております。毎回思うことですが、ほんと皆さん元気だなあと。僕のほうがついていくのにやっとこさです。

今回は、須磨から鍋蓋山までの縦走路。アップダウンの繰り返しが続く長いコースです。当日は途中から雨が降り始め、レインウェアを着なければならず暑さにも参りました。が、なにより登れば下り、下れば登り、の繰り返しで最後は足が上がりなくなってきました。やっぱり普段からちゃんとトレーニングをしておかなければと心に誓いました。

いつもながら皆様に感謝していますのは、皆さんに食料をあたえていただき大変助かっていることです。つつい甘えてしまっって手を出してしまいますが、やっぱりこれからもよろしくお願いします。ほんと助かってます。

これから、残りの半分も皆さんと一緒にがんばって登っていきましよう。僕もみんなに遅れをとらないようにがんばってトレッキングします。

川上豪



# 海

# 船

# 港

## 日本初寄港クリスタル・セレニティ乗船記② 文・上川庄二郎



■かみかわ しょうじろう  
1935年生まれ。神戸大学卒。  
神戸市に入り、空港対策室長、消防局長を経て  
定年退職。現在、関西学院大学、大阪産業  
大学非常勤講師。

### 四 楽しい船内生活 【船内のことなど】

船旅というと、「船になんか乗って一日中海ばかり見ていたら退屈するでしょう」とよく言われる。「そんなことありませんよ!」と返すのだが、中々理解してもらえない。

確かに何もすることがなく退屈しているときなどは、手持ち無沙汰で時間を持余すような時もあるのだろうが、船上生活はこんなものではない。

まずは、船上という非日常の世界に在ることである。プロムナードを一周すれば500メートル、上下には13層という洋上を移動する巨大なリゾートホテルに滞在しているようなものである。

そして、船旅を満足させるものは、何と言っても食べものだ。三度の食事を船以外では取りようがないから、逆に食事のまずい船は敬遠される。だから、食べものに関してはどの船も必死になっている。

レストランにはディナーに訪れるメインダイニングのほか、12階のリドデッキにはセルフサービス方式の食堂があって品揃えも豊富である。主に、朝、昼に利用される。もちろんメインダイニングも朝、昼ともにやっているが、これを堅苦しいと思われる向きにリドデッキがお勧めだ。

その他、イタリアン・レストランや日本食のすしバーも用意されている。こちらは予約制になっていて、すしバーはアメリカ人にも大人気の食事処。日本人すし職人がいるからトロなども握ってもらえる。もちろん、アルコール類以外は全部ただだから財布の中身を心配することも無い。

いくつもあるバーやサロン、ラウンジでは早朝から深夜まで飲みものなどを嗜みながらピアノやハープの演奏などを愉しむことが出来る。

船上のアクティビティとしては、終日どこかで何かが開催されていて、それぞれの選択で好きなものに参加すればよい。まずは、甲板ウォーキング、ヨガ、サーキット・トレーニングといったスポーツ系に始まり、スペイン語・日本語講座(ただしこれは外国人向け)、各種教養講演会(これも同じ)、映画、ダンス教室、ビンゴゲーム等々とバラエティに富んでいる。もちろん図書室、コンピュータールーム、カードルーム、な



プールサイドのサンデッキ



ガラビュフェ(上・右下)



一周すれば500m



カジノルーム



すしバー



イタリアンレストラン

など自分の好みに合わせて利用すればよい。コンピューター大学やピアノ（キーボード）レッスンもあるからここで基礎的な学習もできる。お年寄りたちは、男も女もキーボードに取りつかれたように熱心に取り組んでいる。ボケ防止には最高のレッスンかも？

それに、外国船では必ずあるのが宗教の時間。この船も、カソリック・ミサを中心にした朝の祈りが行われている。

アート・ギャラリー、土産物店、宝石店、フォト・ショップ&ギャラリー、プティックなどショップも色々揃っている。フォト・ショップでは、写真の現像・焼付けも翌日には部屋まで届けてくれるというサービス振り。プティックには、フォーマル・ウェアやさまざまなブランド品を取り揃えていて目の保養をさせてくれる。

最上階には、フィットネスセンターやテニスコート、美容室、サウナがあって、体力作りに励む人、テニスを楽しむ人、サウナを愉しむ人、美容やマッサージサービスを受ける人などさまざまである。プールサイドでは、ジャグジー浴をしたり、サンデッキ・チェアに身を委ね日光浴で肌を焼いたりする外国人が目立つ。私も、原稿打ちの疲れを休めるのにサウナで寛がせてもらった。

ディナーの後は、メインホールで毎晩何かのショーが開催される。ピアノ演奏によるアラウンド・ザ・ワールドやブロードウェイ・ヒット・ミュージカル、ザッツ・ダンス、マジック・ショーなどが上演された。当然のことながら、カジノとダンスタイムは毎晩開かれている。しかし、カジノは日本領海に入ると中止されてしまう。これは、日本の法律がそうなっているからなのだが、外国人船客にとっては迷惑千万なことだろうと思う。

日本では、カジノはまるで麻薬のように扱われているが、競馬、競輪それにパチンコだって景品を現金化するのが当たり前になっている。どこが違うのだろう。ひとりカジノだけをギャンブル扱いし、競馬、競輪やパチンコは健全娯楽というのもどうかと思われる。日本も考え直すべき時に来ているのではなからうか。

## 【クルーたち】

ここらでクルーたちのホスピタリテイ

のいいところを幾つか拾ってみよう。

まずは、ルーム・ステewardess。私たちのルーム・ステewardessは、ダイナー（Dinah）といってデンマーク人という自己紹介。北欧美人でいつも笑顔をやさしい。そして、彼女が「おはようございます！」で一日が始まる。私たちが部屋を出るときは、「Have a nice day!」と見送ってくれ、夕方には、「こんばんは！」と笑顔で迎えてくれる。

ドレスコードがフォーマルの日は、バレンタイン・デーには少し早めだったが、「Our Valentine's Gift to You with Love from Your Crystal Family」に添え書きをつけて、真紅の薔薇のコサージュと胸ポケット用の一輪を手作りして届けてくれた。彼女たちの憎らしいほどのホスピタリティ。フレンドリーという言葉がまさにぴったりである。ほんとに気持ちがいい。

メインダイニングのウェイターたちもみんな陽気で明るくフレンドリーだ。イタリア、オランダ、ベルギー、オーストリア、クロアチア、セルビア、ハンガリーなどユーロ圏と東欧の出身者ばかり。ソムリエは、バルト3国のリトアニア出身という小柄で可愛い女性である。それぞれが日本語で話しかけるのに必死である。こちらも一所懸命日本語の手ほどきをする。

中でも面白いのがイタリア人で、言葉で話せないジョークを態度で示しながらおどけて見せたり、とパフォーマンスに懸命だ。

## 【船内の催し】

ゲーム・広島間4泊5日の洋上生活の間には、ランチタイムにさまざまな催しが行われた。

「ランチビュッフェ：アジア・カフェ」と称して、日本、中国、タイなどのアジア料理をビュッフェスタイルで愉しませてくれたり、「グランド・ガラビュッフェ」と称して、コック長総指揮の下に華やかな料理の芸術ともいふべき料理の数々が、クリスタル・プラザに展示され、これを精魂込めて作ったコックさんたちの紹介が行われる。裏方さんの表舞台というところ。とにかく、一日食べて遊んでナイトショーを観てと過ごすのだから、10日も乗っているとすっきり太ってしまふ。さながら「壺中の天」に招かれて歓待を受けているような「至福のひと時」と言ってもよさそうだ。

# ケンカ、破門、多難な修業時代

中右 瑛

北斎が浮世絵の世界に飛び込むまでには、さまざまな職業を経験した。

養子に入籍した中島家は代々幕府の御用鏡師。そこを飛び出して、十四、五歳のころ、彫刻師某について修業に入るが、一年後、貸本屋の徒弟となり、暇を盗んでは貸本から独習し、文才、画才を養ったと伝わっている。この貸本時代の修業から北斎浮世絵に目覚めたと推測される。

北斎まだ幼きころ、浮世絵師・鈴木春信が最高の人気者だった。明和二年（一七六五）から絵ごよみブームがはじまり、春信描くカラフルで楚楚としたロマンチックな美人画は、

「幽幻・浪漫の世界に誘われるが如し」

と当時、大いにもてはやされていたのである。

その春信が明和七年（一七七〇）、突如謎の急逝。その直後若き司馬江漢のニセ春信事件。役者似顔絵師としてにわかには脚光を浴びた勝川春章。特に北尾重政と組んだ合作絵本『青楼美人合姿鏡』（一七七六刊）は爆発的な人気を湧いた。今も世に最も美しい絵本として世界的に評価が高い。

大衆的に湧きに湧きはじめた浮世絵界。まだ子供だった北斎は、浮世絵の魅力と未来性にすっかりはまってしまうのだった。

安永七年（一七七八）、十九歳のとき、浮世絵師を志し、役者絵専門の勝川派の領袖・春章（一七二六～一七九二）の門を叩くこととなる。

画業は、これよりおよそ七十年の長きにわたるが、その間、さし絵、版画、肉筆画、版本などあらゆるジャンルに活躍した。

錦絵の初作は役者絵だった。

入門一年後、師匠の「春章」及び別号「旭朗井」の一字づつを拝領し、勝川春朗の画名で浮世絵界にデビューを果たしたのだった。

勝川春朗

北斎のファースト  
ペンネーム

中村座八月興行（一七七九）『敵討仇名かしく図』（細判）ほか三点を描く。師匠ゆずりの役者似顔となり、二十歳の初作としては的確な表現で、早くも才能を発揮したのだった。

以降、勝川門を去る寛政五年（一七九三）ごろまでの十五年間が春朗時代である。この勝川門を去る原因が勝川一門仲間とのケンカであった。気短かでプライド高い北斎の奇性格の現われであろう。

前年の十二月、師春章が死亡した。最も頼りにし信



頼仕切っていたに違いない。春章の死をきっかけに、弟子間に葛藤が生じはじめ、北斎は春章の高弟・春好との不仲により勝川門から追い出された。

春好とのケンカの原因は定かではないが、他派の修業に励んだ勉強熱心な北斎に、つねづねねたみを持っていた春好が春章葬儀のおり、春章の下駄で北斎の頭を叩きのめしたという。大勢の中の恥かしめである。北斎も黙ってはいられない。二人は取っ組み合いの大ケンカとなった。

これが最初のケンカである。北斎は人生を変えるほどのケンカを生涯、三度もしてかした。人気作家・曲亭馬琴とのケンカのことは既に述べた(二〇〇三年九月号)。

このケンカについて、明治の北斎研究家・飯島虚心著『葛飾北斎傳』によると、

「他家の画法を学ぶを憤り、春章が春朗(北斎)を破門せり、これより勝川を称せず、叢春朗と改める」とある。

しかし、別説では、春章死亡のあと、春好に絵のまずさを指摘され、恥をかかされたのでケンカをしたと



勝川春朗 四世岩井半四郎のかしく 錦絵細判

いう。春朗号を返上し、勝川派とは断絶した。北斎が浮世絵界から締め出された運命的なケンカである。以降、ペンネームをくると変えることとなる。

勝川派を追われた北斎は、狩野派の融川に入門したがしかし、融川ともまたまたケンカをやらかし、ここも破門。寛政六年(一七九四)ころからは三代堤等や住吉内記広行(一七五五〜一八一二)らに私淑する。

このころの北斎の生活は苦しいものだった。先妻が死んで後妻を迎え、多くの子を養い、例の如く貧乏長屋暮らし、仕事もなし、七味唐辛子を売り歩いていたという。

そこに浮世絵界に突如として旋風が巻き起こった。得体の知れない東洲斎写楽という役者似顔絵師がデビューし、注目を浴び始めたのだった。

■中右 瑛(なかつ・えい)

抽象画家。浮世絵・夢二エッセイスト。一九三四年生まれ、神戸市在住。行動美術展において奨励賞、新人賞、会友賞、行動美術賞受賞。浮世絵内山賞受賞。半どん現代美術賞、兵庫県文化賞、神戸市文化賞など受賞。現在、行動美術協会会員、国際浮世絵学会常任理事。著書多数

■みだら夜話／第十五回

# 菩薩の話

あさぎ まだら

浅黄斑〈作家〉

絵・犬童 徹

花便りが賑やかになる季節になりました。梅が咲き、桃が咲き、いよいよ桜の出番です。さらには沈丁花や木蓮と、まさに百花繚乱の季節が巡ってまいりました。それにしても春の到来とともにこころ騒ぐのは、いったいいかなる天の配剤でしょうか。

北宗の詩人蘇軾を気取ったわけでもありませんが、春宵一刻値千金、春の香気に誘われた小生は三宮のネオン街をハシゴすること十時間以上、ふと気づけばマーザークロスという店で、時刻はなんと午前五時。いやいや、そんな話はおいといて、この一月よりはじめました手まり歌の、いよいよ今月は四月分のくだりです。まずは、その歌詞――。

さて水揚のうずきうずきも、後にゃ広々、釈迦も御誕生、息も絶え間の床の練供養、つくや夜明の鐘の響きは権現祭り。



さっそく恒例の絵解きに入ってみましょう。そろそろ死語に近くなりつつありますが、水揚げというのわかりますね。漁獲した魚を船から陸に揚げることを、こういいますが、ここはそれではありません。でも、あたらずといえども遠からず。芸者や娼妓を魚にたとえて、客を初めてとることを、こういった。何しろ初めてでありますから、痛いんですね。疼くのであります。うずきうずき、はそれを表しておりますが、四月の卯月と掛かっております。

でもって、最初はそんな具合でありましたのに、だんだん慣れて一人前になりますと、もう痛がりもいたしません。後にゃ広々、とはこの様子ですな。避妊に失敗しますと子が生まれることもある。お釈迦様が誕生した日は灌仏会といって四月八日です。花祭りともいいます。

幸いにして経験はありませんが、出産というのは相当苦しいらしいですね。だから息も絶え間の、

となるのですが、それだけではない。奈良に当麻寺という古刹があります。四月十四日にはここで練供養会という行事が行われます。これを「たえまの練供養」とシャレしているんですね。もっとも、この歌が作られた時代は旧暦でありますによって、現在は五月十四日がその日であることを、申し添えておかねばなりません。

で、どんな行事かを一口でいえば、極楽浄土から菩薩が来迎する模様をかたどり、面をつけ二十五菩薩に扮した人々が、阿弥陀に従って練り歩くという、演劇的な要素が強いものです。民俗芸能としては、六世紀ごろに中国大陸から渡来した伎楽や舞楽の影響を受けたもので、能や歌舞伎や人形芝居なども便宜上、外来系統の芸能に組み入れられて問題はないでしょう。

この練供養の行事は各地にあります。神戸ですと西区の大山寺で見物ができます。兵庫県下ではここだけで、五月十二日の午後二時からです。二十五菩薩役は当日の参拝者から募られ、希望者が少ない場合は欠員のまま行事が行われるそうですから、一度、菩薩になってみるのも一興ではないでしょうか。

ところで、すこし脱線しますが、菩薩ってなんだかご存じでしょうか。こういうことって誰も教えてくれないんで、分かっているようで実のところは分からないというのが実情ですよ。古代インドのサンスクリット語を梵語と呼びますが、その発音を漢字に置き換えたのが菩提薩埵、これが

菩薩の正式の呼び方です。略して、菩薩。いわば「デバチカ」みたいなノリですね。意味はというと、悟りを求めて精進努力する者といった感じで、悟りを開いた仏と人間の間にあって、如来になる直前の位になります。普賢や文殊の両菩薩をはじめ、日光、月光などなど、いったい何人の菩薩様がいらっしやるのかは知りませんが、観世音菩薩みたいに、観音様として多様に変化して立派に独立を果たしたかに見える菩薩もあります。

こうして無事に四月十四日の練供養も終わり、明けて夜明けの鐘がゴンとなりますと、当然のことながら四月十五日。この日は京の聖護院で権現祭り（現在は四月二十九日の例祭）がおこなわれた。権現の権には正に対する副、かりそめ、といった意味があり、先に書いた菩薩が衆生を救うために仮の姿で世に現れることをいうのであって、なかでも熊野権現は山伏が津々浦々にこれを広めた結果、熊野神社は全国に三千社を越えて、今も「権現さん」と親しみを呼ばれているのである。



■浅黄斑（あさぎ まだら）推理作家。一九四六年神戸市生まれ。西神ニュータウンに在住。一九九二年小説推理新人賞、一九九五年日本文芸家クラブ大賞を受賞。日本文芸家協会、日本推理作家協会などに所属するとともに、日本文芸家クラブ関西支部長、「きょうも風さえ吹きまする」「ちよんがれ西鶴」「走る死体」「神戸・真夏の雪祭り殺人事件」など著書多数。



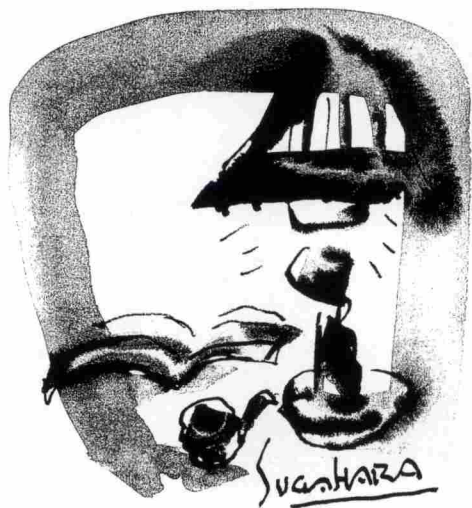
# 将棋

出石 アカル

絵・菅原 洗人

「何年生？て聞いたたら、『三年生』て。それにし  
ては背が高いし、父親の身長聞いたたら百九十セン  
チて言うから、何かスポーツやってはるんや思て、  
お父さん何してはるん？て聞いたんや。そしたら  
その子、何て答えたと思う？『家でゴロゴロして  
る』て。そしたらすかさず横から母親の手が飛ん  
で来て頭をビシャッとはたきよった。その子、ひ  
るむか思たら『お母ん、何すんねん。ほんまやな  
いか』て元気なもんや」

丘将史さん60歳。趣味は将棋。彼が主宰する将



棋の同好会に新しく子どもが入会して来た時のエ  
ピソードである。会員には小学生も十人ばかりい  
て、それがまたゴンタばかりだと言う。その指導  
も彼の役目なのだ。

その丘さん、開店当初からの常連さん。長年の  
お付き合いだが、時には饒舌、ある時は無口。ユー  
モアがあるのかなと思えば、気難しげなところも  
見えて、この人の性格はいまひとつ掴み所がない。  
だけど人の知らぬことをよく知っていて懐が深く、  
不思議な魅力がある。

ところでわたしも将棋を趣味としていたので、彼との話には退屈しない。店にも、加古川在住のプロ棋士、井上慶太八段の詰め将棋色紙（決して達筆とは言えないが、八段の誠実な人柄を感じさせる気取らない字で絵になっている。将棋に興味のある方、解きに来てみませんか。正解の人にはコーヒー一杯無料サービス）を飾っていて、時に七六歩、八四飛車、などと符号で話をすることがある。将棋を知らぬ人には訳が分からない。

丘さん、頼まれて近くの小学校の将棋クラブにも指導に行っている。

「実は今日が今年度の最終回やったんや。終わりに、六年生から一人ずつぼくへの感謝の言葉をゆてくれよった。先ずKから。この子がえらい天邪鬼で、ちっとも言うこと聞きやらん。そやけど、『二年間、将棋を教えてくれてありがとうございしました』て、キチツと言いよった。そして、順に下級生に進んで、最後が四年生のH。色白の、モヤシのようなこの子もまた印象に残る子やった。日ごろ言葉を出さん、自己表現が出来ん、心に何か抱えていそうな子や。そやけどこの子、ぼくには妙になついとって、いっつもそばにまとわりついて来てたんや」

丘さん、子どもの話になるとコーヒーが冷めるのも忘れて夢中である。

「ぼくと二人だけの時は、内緒話みたいに小っちゃい声で話すんやけど、誰かがそばにおったらあかん。今日もみんなの前ではとても挨拶なんかできない。しばらく待ったけど、やっぱりうつむいたま

まで声が出ん。そやから『それじゃあ、わたしから』と言って、ぼくが挨拶して終わりにしたんですわ。ほんでコート着て帰ろうとしてたら、Hがひつついて来てて、ぼくの顔を見上げとるんですわ。『どうしたんや?』てゆうたら、みんなからちょっと離れた所まで引張って行って、ぼくを屈ませて、小っちゃい声で『二年間、いろいろ教えてくれてありがとう』て言いよったんや。ぼく思わず頭を抱えてなでてやってた。十分に教えてやれんで、こっちの方がごめんさい、ありがとうやった。つくづく教師という職業、ぼく、ホンマやってみたかった」

この話を聞いてわたしは、以前彼から聞いた話を思い出していた。

「16歳の時やった。親父、病気で寝てたんや。そやからぼくが一家を支えてたんや。親父、病気に効くゆうて、金魚を食べよった。大きな流金の内臓を生で飲みよった。毎晩一匹ずつ、腹割いて丸飲みしよった。ほんで抜けがらになった金魚を洗面器に放しよるんや。そしたら金魚、泳ぎよる。ゆっくりゆっくり尻尾ふりながら泳ぎよるんや。明くる朝になっても、まだポワンと泳いどった。親父ひとり、それ、じーっと見とった」

丘さん、そんな事情があつて学歴は、中学卒なのである。小学校の教師になりたかったのだが適わなかった人なのだ。

いずし・あかる 43年兵庫県生まれ。「風媒花」「火曜日」同人。兵庫県現代詩協会会員。詩集「コーヒーカッパの耳」（編集工房ノア刊）にて、2002年度第31回ブルーメール賞文学部門受賞。

# 鏡の中のサムライ

中野 順哉

絵・題字 平田 郁

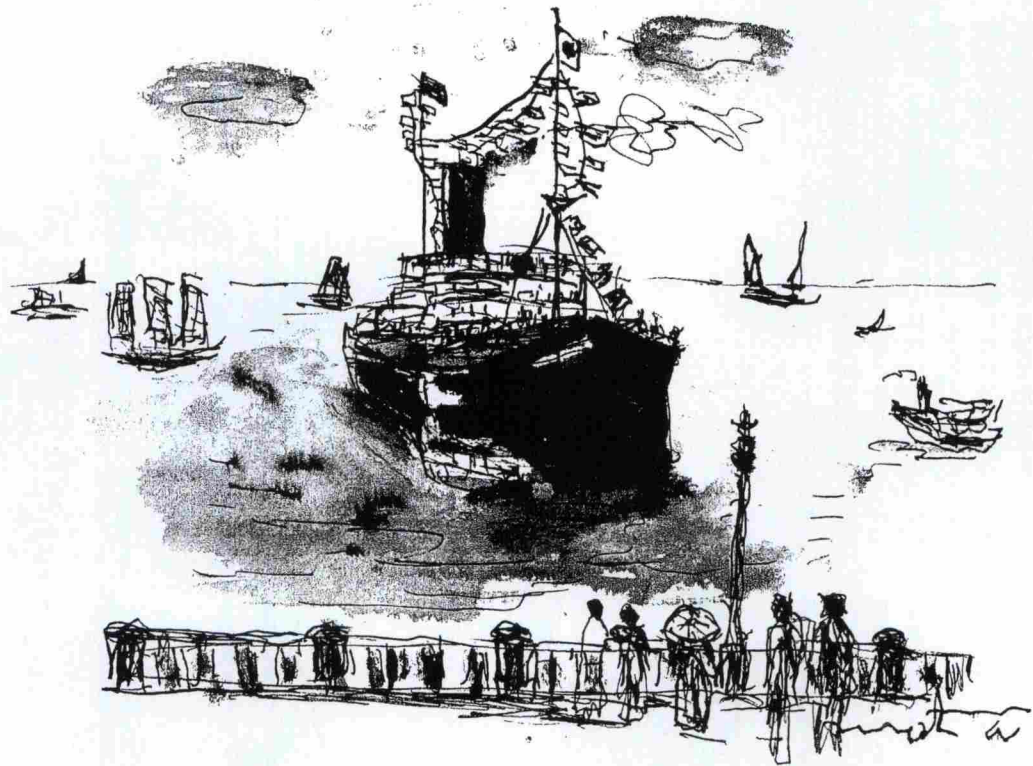
「日本民族は中国人より劣等だ。だから子供みたいに我々を見てはにこにこしている。無邪気なんだよ。しかしこれは我々にとつて都合の良いことだ。日本を指導して侵略や併合から守つてやる代わりに、この国の人間が芸術的なものを作り続け、おとなしく座つていてくれればいい。まあ、言うならば陳列ケースに「参考作品」として並んでいてくれれば、これほど都合なことは無い」

これは一八九〇年頃、神戸に在住していたある英国人の言葉だが、程度の差こそはあれこのような考えが日本に対する一般的な西洋の見解であったといえる。それが三度の戦争を経過することでこの国の立場は大きく変わった。それまでヨーロッパがアジアの中心と考えていた清国に勝利し、また列強の一國ロシアに勝利したこの小国を、陳列ケースに入れておく勇気などもはやどの国も持ち合わせてはいなかった。そして欧州は第一次世界大戦を経験。精神的にも経済的にも大きな打撃を受けた欧州に比べ、日本は一時撤退した欧州諸国のアジア市場を独占し、さらには青島や赤道以北のドイツ領南洋諸島を委任統治することで防衛線

を大きく拡大することに成功したのである。言葉は悪いがこれは「大もうけ」と言っても過言ではなからう。

開戦と同時に輸出超過となり、企業活動が白熱。国民所得は大正元年と比較しても三倍に伸びた。株式投機も各層に広がり、農村でも農作業を放棄した人々が村の「株屋」にむらがり、毎日電話で入ってくる東京の株ニュースにかじりつくと言う有様であった。そして薬品、染料、鉄、紙、暴騰と投機によって次々に成金が生まれていった。中でも船舶の躍進は目を見張るものがあった。大戦で物資輸送船の需要が大幅に拡大する一方、ドイツの快速巡洋艦や潜水艦に連合国側船舶が次々と撃沈されてゆく。空前絶後の海運の戦争景気という波は日本全土、とりわけ神戸を発展させていった。神戸の貿易額は前が約五億円であったのに対し、戦後は十三億を上回った。当然産業は発達し、各地から神戸に移住してくる人も多くなつた。戦後五年で十四万人も人口が増えたのである。休六は、それこそ跳ね上がる航海運賃から「神戸が妥当かな」と考えたに過ぎず、そこが第一次





世界大戦後日本でもっとも発展しつつある都市だとは全く思っても見なかった。休六は船から降りてそのままオリエンタルホテルの前までやってきた。これといった目的は無かったが船で出会った紳士の言葉をそのままにうけて、とにかく見るべきものは見ておこうと思ったのだった。そして入り口に突っ立ったまま、その盛況ぶりに立ち尽くしていたのだった。

「一体、さっきから何人の人間が入りしているんだろう。僕がここに来てまだ五分も経っていないのに。川内で知り合うことの出来る人間全員と短い時間に面接をしているようだ」

人の多いことにも驚いたが、紳士淑女の服装にも驚いた。スタイル、デザイン、生地、どれをとっても故郷ではお目にかかるような代物ではない。またなんと西洋人の多いことか：休六はまとまった言葉にならない感慨をもらしながら、恐る恐るホテルの中に入っていった。エントランスに入るとすぐにポーターがやってきた。

「お疲れ様です。お荷物をお



部屋まで：」と言いかけてポーターは休六の足先から頭のとっぺんまでを一瞥して言いよどんだ。休六はそんなポーターの顔を逆にまじまじとみつめた。よく見るとポーターは自分と同じ年くらいの青年であった。「なんだ、まだ子供じゃないか。都会の作法は知らないが裸になれば変わるどころなどないはずだ。心意気で負けてたまるか。ここでひるんではならないぞ」と休六は腹をくくると「いや、結構。まだ所用があるのでね。ホテルの

場所さえ確認しておけばと思っていたので」と言っ  
てポケットから一円紙幣を十枚取り出してポーター  
に渡した。するとポーターは突然顔を蒼くした。  
「お、お客様。これは…」  
「いいんだ。取っといてくれ」  
「いえ、それは困ります。こんなことをなされて  
は…」

慌てるポーターの口を右手でふさぐと休六はぐっ  
と腹に力を入れて「そうではない。ちょっと教え

てほしいことがある。金を払うからありていに述べるのだ。いいな」と低い声で押し切った。そして力強くポーターの腕を捕まえるとひょいと人気の少ない壁際にまで引張っていった。

「僕の格好はおかしいか？」

「え？…ええ、まあ、しかしそれほどでも…いえ、決しておかしいことなどは…」

しどろもどろのポーターの肩をぐいとつかんで休六はさらに迫った。

「正直に言うのだ。こんなところにくるには間違いの格好かと聞いている」

「は、はい。ちょっと古い格好だと思えますが」

「どれくらい古い」

「八年くらいでしょうか」

「なるほど：僕はここで戦前の格好をしていたわけだね。では逆にもっとも場所柄に似合う格好というのはどういうものだ」

「そうですねえ：ほら、あそこ、あそこに立っている紳士のような格好が今年の流行ですね」

「ん？あれか：単なる灰色の背広じゃないか」

「いえいえ、ズボンをよく見てください。腰のところが太い割には足下が細いでしょ。あれがここ数年の流行ですね。モボというのはみなああいう格好をしています」

休六は鞆からメモ帳を取り出すとそこにポーターの話を書き記した。

「ところでそのモボというのは、ここに来て何をする」

「そりや色々ですよ。でもまあ、お客様の年頃の方は皆レストランで食事をするのではないのでしょうか。このところ外で食事をするのが流行っていますからね。大阪などは顕著ですよ。梅田の阪急食堂なんかは毎日若い人でいっぱいです。でも

誤解してもらったら困りますよ。この料理はソーライスなんかと品格違いますから」

「ソーライス？なんだそれは？」

「ご存じないのですか。五銭で食べられる洋食みたいなものですよ。皿に山盛りの白めしと福神漬けが出てきて、その上に好きなだけソースをかけるんです。阪急食堂の目玉商品ですよ：まあ、大阪の人というのは変わっています。夏には西瓜が沢山売れるそうですがね、客の食べ残しを圧縮機にかけてジュースをつくって、それまで売るのですからね。ですので、そういったものどこの料理とは全く違うものだとして申し上げたのです」

休六はその後も様々なことを聞き出し、一つ一つ話を筆記するともう一枚一円札を渡してホテルを飛び出した。

\* \* \*

それから数時間後。オリエンタルホテルの「レストラン」に灰色の背広を着、流行のヘアスタイルをした一人の青年がやってきた。

「まあ、似合わないこともないな。何事も郷にいれば郷に従えだ。こうやってこの都会の空気にならずに慣れることが大事だろう。さて、さっきのポーターが言っていた品格の違う洋食とやらを試してみようではないか」

テーブルの上にある銀製の輪挿しに自分の姿を映して「これでよし」と言いきかせると、

「モボ」となった休六はウエイターを呼んだ。ウエイターはすまし顔で近寄ってくるのと深々と頭を下げた。休六は粹を吸い込んで胸をはると、さっきポーターから教えられたとおりに言っていた。

「私は遠方から来た。噂に聞いたこの料理を食べてみようと思うが、今日は何かお勧めですか」  
「遠方からわざわざ…恐縮でございます」ウエイ





ターは丁寧にお礼を述べると「本日のおすすめはこちらでございませう」とメニューとは別刷りの紙を見せた。

「なるほど：やはりな」休六はつぶやいた。案の定よく分らない。しかしウェイターは休六のそんな態度にますます恐縮している様子であった。「分からないだから仕方がない」休六はポーターの教えてくれた奥の手を使うことにした。悠然とウェイターに言った。

「どうやら昔ながらのメニューを残しているという噂は本当だね。作家のキプリングが愛したポテトサラタなんていうのは今でも健在なのだろうか？とりあえず彼も手記の中に残しているフリットをとりあえず味わってみたい。中身はシェフにお任せするよ。とはいえまだ日も高い。簡単なコースでお願いできますか」

「承知しました」ウェイターが嬉しそうに去ってゆくと休六はほっと胸をなで下ろした。

「さて、ここから何が見えてくるのだろうか」休六は大きな仕事を一つ終えたように笑みをたたえながらあたりを見

渡した。ポーターの言っていたとおり、そこには静かに談笑する背広の青年と、船で見た紳士の奥方が来ていたような洋服に身を包んだ女性が何組か座っている。それ以外には泊まり客と思われる西洋人が何人かと、初老の夫婦。行儀の良い子供をつれた家族もいた。外の喧噪とはうってかわって、この時間は実にゆっくりと流れていた。

「これが都会というものか。こういった場所は故郷にはない。僕の故郷が日本なら、ここは日本であって日本ではない奇妙な空間だということになる。欧州の文化とはこういったものだろうか。いや、そんなことはまだどうでもいい。結局は本物を見ないと何も分からないわけだから。確か紳士は失望こそが西洋文化の本質だと言っていた。そんなことが分かるためには、いつか僕も欧州に行かなくてはいけないだろう。まずは余計なことを考えずに、当面の問題をかたずけることとしよう。もしかすると失望の味がするのかもしれない」

休六は目の前に置かれたスープを睨むと一番外側に並んでいるスプーンを握りしめた。

休六が丁寧にスープを飲んでいると、突然レストランの中が騒がしくなった。どうしたことかと振り向くと、休六の直ぐ後ろに一五人ほどの男たちがテーブルを囲んでいた。彼らは皆美しい三揃えを着ていたが、着こなしとくるとまったくでたらめで、大きな腹をテーブルにつっかえさせながらも、上着のボタン一つはずそうとしていない。スポンも大きな尻を隠すのに必死で、びんびんに伸びている。おまけに裾はしわだらけ。

その見劣りする連中は注文を済ませると、周りのことも目に入らないように一際大きな声で話し始めた。中でもその団体の中心人物とおぼしきでっぷりと肥えた男は大声で笑い、卑猥な冗談を言っ

ては、腹で波立たせ、テーブルをがたがたとゆらしていた。休六はその上げ上がった巨漢の態度に最初はあっけにとられていたが、徐々に腹が立つてきた。

「実にけしからん。こんな下品な連中はさっさと店員に追い出されるに違いない」

ところがいつまで経っても店員は連中を追い出さない。それどころか店長までがやってきて連中の機嫌をとっている。周りの客もあきらめ顔に、見て見ぬふり。外国人客だけが驚愕のまなざしを向けている。

「なんとということだ。これこそが国の恥。形骸のみの近代国家と嘲られてもしかたがない。このよな馬鹿者どもに榮耀榮華を楽しませるために、薩摩軍人は命を賭したのではない。見ろ、あの外国人たちはきつと思っているだろう。『やはり野蛮な民族だ』と。このままではいけない。そんな事が断じて許されてはならない」

休六はすっと立ち上がると、わきめもふらずにそのテーブルへと向かっていった。そして例の巨漢を指さして言った。

「失礼だが、他の客に迷惑だ。少し静かにしてもらえないか。あるいは話題をもう少し考えてくれ。それが出来ないなら出て行ってくれないか」

休六の言葉が言い終わるやいなや、店内のありとあらゆるものが静かになった。ただ近くのウェイターがコップを落とした音だけが美しく響き渡っていた。



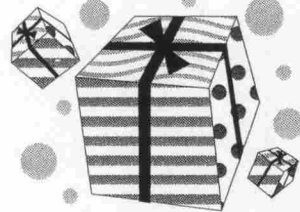
■中野順哉(なかのじゅんや)  
一九七〇年生まれ。関西学院大学文学部フランス文学科卒業。日本テレビマン協会の代表。上方講談の作家でもあり、すでに二十を超える作品が上演されている。



★モネとモリゾ 日本初公開ルアル・コレクション  
京都市美術館では、読売テレビ開局45年記念「パルマルモッタナ美術館展」が開催される。マルモッタナ美術館は、印象派の巨匠、クロード・モネの作品を所蔵する美術館で、ブローニウの森近く静かな住宅街の中に佇む小さな美術館だが、「モネの美術館」「印象派の聖地」と呼ばれ、オルセーやルーブル以上に人気の高い美術館である。

今回は、日本で今まで幻のコレクションといわれ非公開だったルアル・コレクションを中心に展示すると共に、モネをはじめ、ルノワール、モリゾ、カイエボット、リュイリエなど印象派の時代を華麗に彩った画家たちの作品を80点展示する。この招待券をペア5組にプレゼント。輝かしい優れた印象派の作品にぜひふれてみよう。

## プレゼントメイト



### ■プレゼントメイトへのご応募は…

ハガキ・FAXに、希望するプレゼント名・郵便番号・住所・氏名・年齢・職業・電話番号・今月号の感想を明記の上、下記宛先にお送り下さい。なお、商品の発送をもって発表にかえさせていただきます。応募宛先〒650-0001 神戸市中央区下山手通2-13-3建創ビル401(有) 月刊神戸っ子プレゼント係  
TEL. 078-331-2246  
FAX. 078-331-2795

4月25日(日)午後2時から  
は、「中西利雄の人と芸術」  
講師／茨城県近代美術館主

075-771-4107  
<http://www.city.kyoto.jp/bunshi/knma/>

### ★神戸市立小磯記念美術館「中西利雄展」開催

近代的な感覚の作風により、昭和期の水彩画に一線を画した水彩画家・中西利雄(1900-1948)の画業を回顧し紹介する絵画展。この展覧会の招待券をペア5組にプレゼントする。

078-857-5880  
7(六甲アイランド公園内)  
神戸市東灘区向洋町中5・

任学芸員山口和子氏による講演会が開催される。不透明水彩絵具を用いた大作を描き、革新的な制作を試みた中西の作品は、没後55年を経た今日でも、その輝きを放っている。モダンで生き生きとした作品の数々にふれてみてはいかが。  
■開催期間／4月17日(出)5月30日(日)まで。毎週月曜日休館。  
■神戸市立小磯記念美術館／神戸市東灘区向洋町中5・



「川岸」1922(大正11)年

★市民映画劇場ウィズコン  
ティ「熊座の淡き星影」上  
映  
ウィズコンティ唯一のミステリー「熊座の淡き星影」が、シーガルホールにて上映される。主演はクラウディア・カルディナーレ、ジャン・ソレル。1965年ヴェネチア国際映画祭金獅子賞を受賞している。この招待券をペア3組にプレゼント。

微妙で曖昧な会話や視線時代に取り残されたような広大な邸宅の内部、古風な家具や絵画、風が吹きすさぶ庭。幻想的な映像に、セザール・フランクの美しくも哀しい旋律が響き渡る。映画史に君臨する帝王ウィズコンティが描く、甘美でミステリアスな世界にひきこまれるだろう。

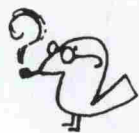
■4月16日(金)・17日(出)11:00②13:30③16:00④19:00(当日一般1500円)  
■会場シィガルホール(神戸文化小ホール)  
<http://www.kobe-eisa.com>



妖艶な魅力のクラウディア・カルディナーレ



愛読者  
サロン



★友達と酒めぐり特集にこうと言っていたので、酒めぐり特集はとも参考になりました。

(灘区・福井美幸)

★「酒めぐり特集」を特に楽しく読ませてもらいました。一度行こうと思っておりますが、記事を読み今度は自分の一番行きたい所を選び、春実行です。

(西区・小山みき)

★有馬歳時記の記事を見て家族で有馬温泉に行きたくなりました。

(長田区・影山たか子)

★ひょうこツーリズムの熊本啓祐さんのお話を興味深く読ませていただきました。最近観光地での「ボランティアガイド」の活躍を耳にするのですが、一度神戸っ子でも、市内でボランティアガイドさんのいる。名所・旧蹟を特集していただけないでしょうか。よろしくお願いいたします。

(三木市・福岡奈津子)

【読者の方からのお写真】

★伊藤博文公は明治の憲政史の中心人物で、初代兵庫県知事、初代首相でもありました。満州ハルビンで

暗殺されました(1908年68歳)。

初代の銅像は日清戦争(明治27・28年)の講和条約の功績で、その後明治37年に湊川神社に建てられました。しかしその翌38年、今度は日露戦争の屈辱条約で一部群衆により福原口に引きずられて行きました。その後、山口県萩の生家に戻りますが、像が傷められましたので陶像に代り

ました。

この写真は、それを悼み明治44年、大倉山に建てられた二代目です。が、この銅像も第二次世界大戦の金属供出で無くなり、今は台座だけになっています。

福原と言いますと、神戸の恩人平清盛さんを偲びますが、昭和17年の春、軍隊入隊前によく、夜になると新開地相生座の横の坂を降り福原桜筋に入り、その右

側の「孔雀」という音楽喫茶を度々訪れました。室内はいつもあらゆる階層の人達と、タンゴのリズムで熱気ムンムン。それは、何か強く訴えるような、また少し惱まし、暗く甘いメロディーで、ポーラ・ネグリの「夜のタンゴ」(菅原洋一さん)だったと知りました。以来私の心の歌となりました。

(加西市・白水誠三)





